

図書館だより No. 4

平成 29 年 7 月 20 日発行

さあ、夏休みが始まります。1学期を頑張った自分へのご褒美にみなさんはどんな夏休みを過ごすのでしょうか。夏を代表する花といえば、ひまわり！「ぶらり途中下車の旅」でも紹介された熊谷市葛和田(くずわた)のひまわり農園や清瀬ひまわりフェスティバル(8/19～9/3)など、近郊にもひまわりを楽しめるスポットやイベントがあります。暑さに負けず太陽に向かって大輪の花を咲かせるひまわりを見て、夏バテ気味な気持ちを立て直し、夏を楽しんでください。



2学期(8/23 始業式)が始まると、すぐに2年生は修学旅行です。今年からは行き先がニュージーランドとなりました。みなさん、様々な体験を通し、思い出をたくさん作って楽しんでください。そして、その後には桔梗祭が待っています。学校の一大イベントとなる桔梗祭、今年もみなさん気合いを入れて準備を進めているかと思います。図書館は夏期講習中も開館していますので、修学旅行や桔梗祭の事前準備で調べものをするのにも、どんどん利用してください。2学期も早々に忙しくなりますので、夏休み中も1学期の疲れをしっかりとった後には、規則正しい生活を心がけましょう。今年の桔梗祭も楽しみにしています。

*春夏秋冬、日本の絶景

291-シ『死ぬまでに行きたい！世界の絶景 日本編』 詩歩 || 著 三オブックス

日本全国よりすぐりの絶景が集まった1冊。手に取った瞬間に早速、ひまわり畑の表紙(北海道名寄市のひまわり)に心を奪われます。ずっと見ていたくなるような綺麗なひまわりですが、本を開くとさらに、うっとりするような絶景がどこまでも広がり、旅に出かけた時のようなワクワク感でいっぱいになります。

行き方やその土地の名物、近辺の観光案内なども載っていて、旅の計画がしやすくなっていますので、「ここはいつか絶対に行ってみたい」と思う絶景に出会えたら詳細までチェックしていきましょう。全制覇を目指すのも夢が膨らんでいいですね。旅の出発を思い浮かべながら、まずはこの本を楽しんでください。

*お笑い芸人志望の、ウエイトリフティング女子！？

913.6-ヨ『空色バウムクーヘン』 吉野 万理子 || 著 徳間書店

見た目は小柄で、ほわっとした女の子。そんな若葉の夢は、お笑い芸人になること！そのギャップで告白した相手には「黙ってりゃいいんだけど」と振られてしまったけど、若葉はくじけない。そして、相方探しに気合いを入れて入学した高校で運命の相手 大月弥生と出会う。しかし、ふたりでスタートを切ったのは、ウエイトリフティング部の活動だった。「なぜだー」という気持ちを抑え、「全ては弥生を相方にするため」と覚悟を決めた若葉も、バウムクーヘンみたいな見た目をした重りを持ち上げている内にウエイトリフティングに対する気持ちが変わっていく。笑いあり、涙あり、恋あり、ギュッとつまった青春をお楽しみあれ。

本で涼を感じる

みなさん、先生方から紹介していただいた夏のおすすめ本はさっそく読んでいますか。図書館で絶賛展示中なので、たくさん借りにきて夏の読書を楽しんでください。夏の長期貸出はじっくり読書を楽しむのによい機会です。先生方のおすすめ本だけでなく、色々な本に触れる夏を過ごしてください。「こういう本が読みたいのだけど、どれがいいかな」と迷っている時には、いつでも声をかけてください。この夏あなたにぴったりの1冊を一緒に探しましょう。

ここでは、夏の暑さを忘れられるような本を集めて、みなさんに紹介します。夏本番のこれから、本からひとときの“涼”を感じてみてください。

596-ス『ハンドメイドソーダレシピ88』 スタジオタッククリエイティブ

シュワシュワと弾ける炭酸の泡がひときわおいしそうに感じられる夏。この夏は涼やかな気持ちで色々なソーダを手作りで味わってみませんか。ソーダの定番ともいえるメロンやレモン、ブルーハワイのソーダから、アレンジの加わったおしゃれなソーダまでたくさんのレシピが紹介されています。中には、モカソーダシェイクや唐辛子ジンジャーソーダ、はちみつヨーグルトソーダなど、まだ見ぬ世界へと飛び込んでいけそうなレシピも載っていて、かなり心惹かれます。ひとつずつ試していって、マイベストの1杯を見つけてみませんか。

748-リ『Waves of North Shore』 クラーク・リトル || 写真 PARCO

ショアブレイクと呼ばれる岸辺でブレイク(=波が崩れる)する波は、サーファーからは「一番危険」と言われている波なのだそう。その危険な波に立ち向かい、波が見せる一瞬の絶景を撮っているクラーク・リトルさん。本を開くと、そこには夏の熱気を忘れさせてくれるような波、波、波。真っ白な水しぶきが今にも本から飛び出てきそうな迫力です。エメラルドに輝く波、空の色を映して青や朱色に染まった波、キラキラと光をまとった波、時間を忘れてずっといつまでも見入ってしまうほど、美しい世界が広がっています。

B913.6-ツ『ふちなしのかがみ』 辻村 深月 || 著 角川書店

トイレの花子さんやコックリさん、学校の七不思議…いつかどこかで耳にしてきたであろう怪談話。「怖いけど、知りたい」そんな気持ちをみんな感じたことがあるのではないのでしょうか。これはそれらの怪談を思い起こさせつつも、まったく別物に姿を変えた辻村深月さんの怪談集です。単なる怪談ではなく、怪談とミステリーが合わさったようなストーリー展開が待っており、読んでいると不思議な世界へと連れて行かれます。そして、想像もつかない結末に背筋がスーッと寒くなっていきます。子どもの頃に感じたものとはまた違う怖さを体験してみませんか。

日本の誇れる文豪たち～絶賛活躍！現代作家編～

『日本の誇れる文豪』4人目は埼玉の北葛飾郡松伏町(レイクタウンがある越谷市の近くです)育ちの作家 羽田圭介さんです。家庭内ストーキングという題材を扱った『黒冷水』で第40回文藝賞をその当時、最年少(17歳)記録で受賞。その後、三度の芥川賞候補を経て、四度目『スクラップ・アンド・ビルド』にて2015年に第153回芥川賞を受賞しました。この時は、又吉直樹さんの『火花』とのW受賞でも話題となりました。メディアにも多く出演しており、昨年は俳優デビューもしています。

「視野の狭い人が何か間違っているかもしれないことをすごく一生懸命やるっていう話を書いていますよね」(WEB本の雑誌「作家の読書道」より)と羽田さん自身も言っているように主人公たちはそれぞれが置かれた環境の中で、「こうだ」と思ったものに突き進んでいます。時にそのひたむきさは歪んでいるように見え、彼らが物語の中で一体どう進んでいくのだろうと、読者は目が離せなくなります。

*第40回文藝賞受賞作 ～17歳が描く壮絶な兄弟の関係～ 913.6-ハ『黒冷水』 羽田 圭介 || 著 河出書房新社

隙を狙っては兄の部屋をあさる弟の修作。形跡を残さぬよう慎重に兄の私物を物色しては一人ほくそ笑む。しかし、そんな弟の悪行は正気(まさき)にとっては詰めの甘いバレーの行いであり、そんなバカげたことをしてくる弟を疎ましく思っている。そして、両親の前で悪行を暴露された弟はさらに兄を憎んでいく。負の連鎖が止まらないふたりの関係は仲の悪い兄弟という枠には収まりきらないほどに、ヒートアップしていく。「黒冷水」とは、正気の体をめぐる黒く凍えるほどに冷たい流動体。それが正気の心を侵食していく。

度を越したふたりのいさかいは、どこかで転機を迎えるのだろうか。それともこのままぶつかり合うのか。最後の最後まで気の抜けない展開が読者を待っています。

*羽田圭介の描く就活生 ～超氷河期の就職活動に挑む異端児 太郎～ 913.6-ハ『ワタクシハ』 羽田 圭介 || 著

オーディションを勝ち抜き、太郎はギタリストTAROとして高校生でメジャーデビューした。デビュー後は紅白歌合戦出場、全国ツアーを叶えていくが、1年足らずでバンドは解散、太郎の元にやってくる仕事は今や細々としたものばかりだった。その仕事をこなしつつ通う大学では仲間たちが就職活動に精を出している。その様子に引っ張られる形で、遅れをとりつつも太郎も就職活動を始める。しかし、軽い気持ちで始めた就職戦線は超氷河期。「ギタリストTAROは、就活なんてしなくてもいいでしょう」という周りの声とは裏腹に、それだけではやっていけない現実に太郎は気づいている。ギタリストとしてのプライドをよぎらせながらも、応募しても応募しても思うようには進まない就職活動を淡々とこなしていく。十人十色の就職活動、そこには実際に太郎のような就活もあるのかも。

*第153回芥川賞 ～引き算か足し算か、介護には思想が要求される！～ 914.6-ニ『スクラップ・アンド・ビルド』 羽田 圭介 || 著

結局、おじいちゃんはどうだったんだろう。

「じいちゃんなんか、早う死んだらよか」そう口にする祖父に、健斗は苦痛のない穏やかな死を与えようと思いつきます。無職で自信のない絶不調の健斗は、祖父の面倒をよくみて、甘やかし、楽をさせることで尊厳死をアシストしようとするのです。その一方、老人を弱らせることの逆をいけば能力は向上し人生も前進することに気づきます。そこで自ら筋肉トレーニングに励み、猛勉強し、採用面接も日々受け続けます。そうすることで1年ぶりに職を得て家を出ることが決まります。

「じいちゃんはすっかり馬鹿になってしまった。死んだらよか」祖父は本心からそう言っていたのか、それとも健斗に孝行孫としての居場所を確保したかったのか…。う～ん、気になりませんか。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

島本理生さんの『七緒のために』(913.6-シ 講談社)を読みました。

転校先で雪子はどこか浮世離れた雰囲気を持つ七緒と出会った。前の学校ではクラスメイトたちに馴染めなかった雪子だったが、七緒とはすぐに打ち解けることができた。しかし、意図しているのか無自覚なのか読めない七緒の行動に雪子は振り回されてしまう。それでも、生まれて初めて自分を必要としてくれた七緒を雪子は理解したいと思う。その言葉の、その行動の真意は何だろうと、考えて、考えて、向き合おうとするけれど、結局は行き止まりにぶつかってしまう。そんな14歳の女の子の歯がゆくて、どうにもならない痛々しい感じがずっと心突きてきます。雪子の視点で書かれている物語ですが、ラストを読んだ後は、「七緒の視点で読んでみたら、違うものが見えてくるかもしれない」と興味が湧いてきます。同じ年頃のみなさんが読むと、グッと身近な出来事のように感じられるかも。【今井】

TV番組「世界一受けたい授業」で、“英語は、3語で伝える！魔法の英会話テクニック”というコーナーを見ました。英語力に不安のある芸能人に、中山裕木子先生が指定した英単語100個(動詞42+名詞58)を覚えてもらい、その後、海外から来た観光客を英語で案内するというものでした。その結果はとても自然な会話で、日本の観光地と一緒に楽しみながらまわり紹介することができていました。英語がこんなに自由に使えるようになったら、海外旅行だって簡単に思えるし、何よりももっとずっと楽しめるはずです。そこで中山先生の本、『会話もメールも 英語は3語で伝わります』(837-ナ 中山裕木子 || 著 ダイヤモンド)を、読んでみました。

コツは正しい英語をがんばって組み立てるのではなく、3語(主語、動詞、目的語)で表現するという。またそのためには動詞が決め手になること。be動詞よりも他動詞、そして受動態より能動態。お勧めの動詞のリストもありました。あとはそれを覚えて使えるようにするだけ。だけ、なのですが…。

ただ読むだけでなく、活用できるようになるまではまだちょっと(大分)時間が必要なようです。【鈴木】

You made it!